

砂漠の思想
安部公房
講談社

砂漠の思想

昭和四十五年二月十五日 第一刷発行

昭和四十五年六月二十日 第七刷発行

著 者 安部公房

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二 郵便番号・一二二

電話・東京(九四二)二二二一(大代表)／振替・東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定 価 五八〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© Kōbō Abe 1970 Printed in Japan

砂漠の思想

目次

I ヘテロの構造

ヘビについて	I
ヘビについて	II
ヘビについて	III
死人登場	
死人再登場	
SFの流行について	
文体と顔	
S・カルマ氏の素姓	
自己批判	
実験美学ノート	
いかに生くべきか	
スターの解毒作用について	
幕末・維新の人々	
ミラーとの手紙	

90 87 81 74 67 61 58 51 38 34 29 21 17 11

種のない話

種なし人間は悲劇か

『裸の王様』とこども

猫的なもの

良識派

青春

反平和的玩具

社会の落伍者

大義名分

道にこだわって道を失う

屋根の上で死んだ犬

お手本の学び方

子は親の鏡

チャイナ・マーブル

新しいページ

古地図の修理

居るが良い

人間的ということ

悲劇と喜劇の同居

道徳教育的犯罪統計

ガラスの夢想

機能美の限界

水源における同情

三匹のサルの話

マスコミ利用のマスコミ反対論

習慣のとりこ

くだものとわんぱく

時計の針

うまい字　へたな字

知りすぎた人

笑わぬ人

忘却の権利

境界線上の衝動

雨占い

現代の聖職

旅へのいざない

枯尾花の時代

因果律

委託殺人

私の書きたい女

へテロの構造

Ⅱ 砂漠の思想

映画俳優論

映像は言語の壁を破壊するか

モンローの逆説

ミュージカリス

ミュージカリス再説

ミュージカリスの反省

裁かれる記録係

ストーリーという罫
忘れられたフィルム
ばらを摘みとれ
全面否定の精神
砂漠の思想

Ⅲ 一事が万事

事件の背景
北海道二つの顔
羽田空港
局外者の発言
ミラチェック君の冒険
ジプシー部落訪問
アメリカ発見
モスクワとニューヨーク
性問題誇大関心症という病気

384 378 360 353 342 338 332 317 275

261 251 241 231 221

被告席から
殺人が悪なのではない
現代のヒーロー
あとかき

装幀
横山
明

428 412 400 389

砂漠の思想

安部公房

I

ヘテロの構造

ヘビについて I

——常識について——

ヘビ年に、ヘビのことを書いたりするのは、まったく陳腐な思いつきである。しかし、陳腐から目をそむけてしまうのは、もっと陳腐だ。そこで私も、多少意地になり、「ヘビ、ながすぎる」とルナールのしゃれた文句を想出したりしながら、なんとかヘビをこなしてやろうと、身構える。メズサの頭のヘビ、イヴを誘惑したヘビ、ツァラ・トゥ・ストラのヘビ、童話の白いヘビの精、テセウスの退治した翼のあるヘビ、ヤマタのオロチ、アンリ・ルッソーのヘビつかいの絵、それから家の精と考えられている青大將や、私の友人のものすごいヘビ嫌いのことなどを、まったくヘビにふさわしいのらりくらりした連想でたどってみるうちに、結局これも常識的な結論だが、やはりヘビがなぜそんなに不気味なのか、その理由について考えてみようということに辿りついた。

考えてみればヘビに関するこの不合理な恐怖心は、中学生のころからその不合理性のゆえに、私を悩ましつづけたものだった。ヘビのもつ不気味さは、単なる恐ろしさとはちがいが、なんとも奇妙なものである。もつともヘビに平気な人もあり、そういう人はふつう変態的だと考えられている。ヘビの不気味さは、たしかに猛獣の物理的恐怖に比して、すこぶる生理的だということが言えるだろう。だがそれは単に「ヌラヌラ」という形容で示される類似性だけで説明されるべきでない。「ヌラヌラ」

だけなら山芋だって、カエルだって同じことだ。それに、實際へビにさわったことのある人の説によると、へビの肌は決してそんなにヌラヌラなんぞでないそうだ。「ヌラヌラ」の共通説は、へビとセックスとの物神崇拜的な結合から、逆に推論された心情的概念ではないのか。へビの生理的な不気味さは、決して視覚的なアナロジーだけでもとめるべきでなく、かえって人間の中に残っている原始的な部分、すなわち物神崇拜の不合理な、レヴィ・ブルジュルの言葉を借りればプレ・ロジックの部分に求められるべきかもしれない。あるいはさらにさかのぼって、人間以前の時代の生活形態、多分そろそろ不自由になりはじめた半樹上生活時代にもとめるべきだろうか。へビにおびえる小鳥の姿は印象的である。その生活機能からみて、樹上生活者にへビがいかに恐ろしかったか想像に難くない。

だが、唯物論者でありバヴロフの弟子である私は、記憶をあくまでも言語機能として考える立場におり、身体記憶とか、原始の追憶とか、そう言った非科学的な考え方に組することはできず、したがって記憶の遺伝などを認めるわけにはいかないから、へビに対する恐怖も樹上生活のなごりと断ずるには、かなりためらいを感じないわけにはいかないのである。むしろ私は、そうした考えこそ、へビの不気味さに対する、通俗的な合理化だと思う。この考え方は、さらに極端になれば、数千万年前の、ハチュウ類に対する哺乳類の劣勢時代に理由を求める結果にまで行きつくに相違ない。常識による思考の機械化というやつである。

という具合に考えてきたものの、こなすどころか、まさしくへビ的文章の見本になり、このまま行けばますます混乱するのは必定である。気取りはよして、ズバリとへビの本質にせまる、科学的方法を採用したほうが得策ではないか。その方が多分私には似つかわしい……と、これまでの私の発想をふりかえってみると、なるほど私はすこし気取りすぎていた。へビの不気味さなどと言いながら、要するに私はへビそのものについてではなるべくふれないようにして、へビという言葉を追いまわしていた

にすぎないのだ。しゃれっ気などというものは、つまり言葉の化粧である。一つ私はヘビそのものでズバリといってやろう、とは言ってみたものの、今は午前三時、ヘビ屋に使いを出すわけにもいかず、さりとて動物園に出掛けてみるわけにもいかず、まあこれも口先だけのことになりそうだ。それくらいなら、ヘビなどというのはよして、むしろ不気味さの方だけを問題にしたらどんなものか。それが欠点だと言われても、私としては、書出した以上なんとしても納得のいく結論を得ないと気がすまぬ。ヘビから神秘のヴェールをはがしてしまいたい。

……タバコを二本、しばらく間をおいて、よしと私は独白する。私の目は狂っていなかった。不気味さそのものに肉迫しようとした私は間違っていた。ツアラ・トゥ・ストラの家来のように、ヘビはたちまち知的な論理にさえなってしまった。不気味な恐怖とは生理学的に、神経の一種の失調だと考えられる。外界の感知と、それへの反応は、種々な段階の条件反射としてとらえられるが、もし非常に複雑な仕組で行われる必要がある場合、しかし対象の完全な把握ができなかったとしたら、その反射系にはたちまち恐るべき混乱をきたし、失調的反応を示すだろうことは想像に難くない。われわれ人間の場合、生活の高度な社会化によって、言語を媒介にする条件反射、すなわち意識生活が非常に広範になり、またその利用も極めて日常化している。ここで常識の世界という、実はひどく複雑な仕組を、習慣によって単純な略記号化した部分が、大きな構成部分をしめることになる。そこにもし、説明しつくせない対象が、しかも強制的に反応を強要するものとして現れた場合、常識・反射系に混乱とこわばりが生じ、その生理的失調が、不気味さとして意識されるのは当然ではないか。ヘビは、われわれの生活圏にきわめて近く存在しながら、しかも神出鬼没、その生息はとらえがたく、その上アナロジをもとめにくい異常な形態によって、われわれにそのような失調的混乱をおこさせる大きな必然性をもっている。このことが要するにヘビの神秘のすべてにちがいない。常識系の混乱そ

のものを常識にはめこむために、神話が生れ、プレ・ロジックが生れるのだ。

私は以上の結論に、はなはだ満足し、また確信をもったのだが、科学的と言った以上、証明の可能性について反問されることは、むしろ覚悟の上である。あいにく手もとにヘビがいなかったために、その証明の実験を報告できないことは残念だが、しかし論理的にその証明が成功するだろうことは保証する。ヘビ嫌いの人に、無理にヘビになれさせるのだ。体でヘビの一切を熟知させるのだ。ヘビの肉を食ひ、ヘビにさわり、ヘビを見つめ、日常不断にヘビと生活をともにさせるのだ。さらにヘビの動物学的研究に没頭せしめる。私自身、近い将来、極端にヘビ嫌いの友人に対して、この実験を行ってみたいと思っているが、しかし経済的な理由で自信がもてない。被験物としての友人に支払う金はかなりのものでなければならぬだろう。そこで、読者諸君の中に、それだけの経済的ゆとりと忍耐力のある方がいたら、ぜひためされることをおすすめしたい。かならずヘビの恐怖から解除され、猫に對するごとく、ヘビを愛撫する友人を発見するに相違ないのである。

……と、つい調子にのり、「ヘビ、ながすぎる」なんともうまみのある文句ではないか。この一句でヘビはたちまち一箇の物体と化した。物体になりたがらないヘビを、常識系に入りこもうとしないヘビを、あっさり物体化してしまった。これ以上、なにを言うことがあろうか。それに私は、いっさい気取らないことにきめたのだ。

と、ここで突然、私の思考は、リッチ・コールダーの『砂漠と闘う人々』に飛躍した。その飛躍を暗示したものが、ヘビの常識系への作用だったのである。

常識系とは、生活の中で、もつとも保守的な部分と言うことができるだろう。それは完全に受動的な部分であり、比喩的に言えば、盲目の世界だ。外界は、記号としてしか存在しない。言葉は、外界を抽象して把握する道具としてではなく、盲人をまねく鈴の音にしかすぎなくなる。外界から命令を